



小説



小学一年生のおこちゃま
いじめストーリー

hina1416

第1章 小学一年生のおこちゃまいじめストーリー

私達が通うポテト小学校は今日入学式だった。

「あっ、由奈ちゃん！おはよう！」

「リスちゃん！」

「同じクラスだといいねーっ」

「そうだね！」

「じゃ、また後で！」

お母さんと一緒に小学校の校舎へとはいった

「へえ～ | 中は広いのか～・・・。」

名前が貼ってある席にすわると斜め前にアリスちゃんが見えた

そして入学式は始まった

「え～、一年生のみなさん。ご入学おめでとうございます」

「これからですが、親御さんと一緒に各教室に入ってもらいます」

そして私とお母さんは指定された教室に行った

教室に入るとアリスちゃんがいた

「あっ、由奈ちゃん！同じクラスーっ！」

「本当だ！うれしい！」

「みなさん！ご入学おめでとうございます！今日から君たちの担任になる、天野 静 です！みなさんのために精一杯頑張ろうと思うのでよろしくお願いします！」

そのあと先生が親に説明をした。

今日は入学式なので先生から説明を受けたらそれでかえっていいのだ。

ガッターン！！！！

前の席から椅子が倒れる音がした。

ありすの席だった。

「アリスちゃん！大丈夫？！」

「お母さん、、、くるし、、、のどが裂けるう・・・」

「アリス？！大丈夫！？いますぐ病院連れてくからね！」

「先生失礼します！」

「え、あ、はい！」

アリスが倒れて病院に運ばれた。

説明が終わったのでみんな家に帰った。

私もお母さんと一緒に車で家に帰った

第2章 小学一年生のおちゃまいじめストーリー

アリスちゃんが倒れて病院に連れて行かれてた。そして3ヵ月、4ヵ月と経った。

10ヵ月経ってやっとアリスちゃんが登校してきた。どうやらアリスちゃんに病気が見つかったらしい。

噂で聞くと「マイコプラズマ感染症」らしい

マイコプラズマ感染症とは、マイコプラズマ・ニューモニアエ *Mycoplasma pneumoniae* という名前の病原体で、通常の細菌とウイルスの中間の大きさで性質を持っていて、ウイルスと異なり、人工の無細胞培地で増殖できる最小の病原微生物である。普通の細菌と異なり、細胞壁を持たず、3層の限界膜をもっており、ペニシリン系やセフェム系などの抗生剤が無効で、マクロライド系やテトラサイクリン系の抗生剤が有効らしいと聞いたが。小学1年生でこんなこと知ってるなんてすごく不思議におもうが。もちろんこんなの知ってるわけ無い。お母さんに聞いた。

もう10ヵ月もたってるんだ。勉強面やらいろいろ心配だけど、もっとほかに心配すべきことがあると思うんだけど。

がららっ……

一瞬同時にみんな振り向く。そこにたっていたのは入学式とは別人のような姿のアリスちゃんだった。

手を頭にかかえて、マスクをして、顔を真っ赤にして、足がガクガク震えていた。

「……………」

しんとした空気の中アリスちゃんが歩き始め自分の机へと行った。

「……ぷっ」

「あはははははははッ!」

「えっ……。」

みんなが一斉に笑い出す。……………?

「おえっ……………ぷ」

「おえー! きたねえええ! こっちくんなボケ!」

「げほっげほっ」

……………

「いっ……………」

「あはははははははっ、みんな投げろ! 投げろ!」

みんなが投げつけていたのは……………

……………!?

針だった。

「いっ……………痛い……………」

アリスちゃんの皮膚が取れていた。

「痛いよお・・・やめてよお・・・」

この人達、本当に一年生なのか・・・？

実際は高校生だったり・・・

「あっ、いいもの見つけたーっ!!!」

「なにになに～？」

「ほら見てみて～マッチ!」

「げっ、それはさすがにまずいんじゃない～い？」

「おい～、甘すぎ～！こいつの病気が掛かる前に殺しとこうぜ」

「・・・！ちょっといくらなんでもやりすぎだよ」

「は？なに言ってるの？お前らだってこいつのこと気持ち悪がってただろ」

「だからって、殺すなんて、犯罪だよっ・・・」

「ふん。しないならしないで別にいいんだぜ」

こいつら絶対小1じゃないっ！

ガララララララ

「!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

「こらっ！何やっているの?!」

「やっば～、先生に見つかったア～」

「アリスちゃん?!アリスちゃん!?!」

返事がない。

第3章 小学一年生のおこちゃまいじめストーリー

「アリスちゃん?!アリスちゃん?!」

「やっべー動かねー、まさか死んじゃった系パターン?」

「呼吸が荒いわ……」

「すぐにお母さんに電話して病院行かないと……!」

先生はそう告げて教室を出て行った

「うはーっ、やべえ。これってマンガみたいなパターンで、結局死んじゃう感じ?」

「ちょ、ちょっと、死んでも私たちのせいじゃないわよ?」

「は?何言ってるの。全員のせいだよ。」

え、ちょまて。私なにもしてない。私はただみてただけ。助けられなかったけど。

入学式のときを思い出す。教室に入ったらアリスちゃんが元気よく話しかけてきてくれたこと。

特に目立ってなかったアリスちゃんだけど、内面をみればだれだっていい人だってわかるはず。

そんなこと言ってるって、実際助けられなかったじゃん、私。

いつもの恩返しを今頃したいだなんて。もう遅い。

先生が戻ってきた。お母さんはすぐ来るそうだ。

それまでにアリスちゃんを保健室に連れていった。

アリスちゃんの今の苦しさはいじめよりも苦しいはず。

実際に「プラズマ感染症」とは普通に登校してくるものではない。

普通は入院レベル。アリスちゃんの親はどうしてのんきに学校なんて連れてきているんだろう?

あまりにも無責任すぎる。しばらく経って、アリスちゃんの親がきてアリスちゃんは早退した。

「さあ、誰がやったのかしら?」

先生が厳しい顔で、厳しい声で言った

「俺たち全員です。すみませんでした」

「すみませんで済むと思っているの?!あのままやっていたらアリスちゃんは死んじゃうかも知れないのよ?!あなたたちは後悔するだけよ!

あなたたちはまだ一年生なのよ?!?いくら一年生でも人を殺しては絶対に許されないわ。あなたたちは、この世で一番やってはいけないことを

やってしまったのよ?!ちゃんと自覚してるの?!?あのままアリスちゃんが死んでたら困るのはあなたたちのお母さん、お父さん、家族なのよ?!自分のせいで、ほかの人にまでめいわくがかかるということを忘れないでちょうだい!お母さん、またはお父さんが高額なお金を払わなきゃいけない場合だってあるんだから……。」

「ごめんなさい……もう二度としません……。」

「わかればいいのよっ!いい?!二度とあんなことしないでちょうだい!!!」

「はい」

パサッ

……?紙が飛んできた。中身を開けてみるとこう書かれていた

【この手紙はこのクラス全員の元にあげてある
ユナ、おまえからもなんか言ってやれよ・・・】

・・・・・・。
なんかって何。

「私達はどうしてもアリスちゃんをいじめたいんです！」とでも言えと？
「本当にいじめたのは私達じゃなくて別の人なんです！」とでも言えと？
大体こんな事になるなんて最初からわかってないのかね、今時の一年生は。
今時の一年生は結構能の回転が早いと聞いたのだが、あれはデマか。
まあいい、私からなにかいう気はない。たとえ言わなかったらいじめられるとしても。